

遺教経について

—涅槃会にちなんで—

駒沢女子大学教授

安藤 嘉則

二月十五日は釈尊のご命日です。釈尊は八十年のご生涯を閉じられるまで、灼熱のインドの地で伝道を続けられました。

最後は故郷カピラ城へ向かう旅の途中、クシナガラという地で亡くられています。これを入滅、もしくは般涅槃といえます。

二月に入ると、各地のお寺では釈尊の入滅の様子を描いた涅槃図を掲げられ、釈尊をお偲びする涅槃会が行われます。また、多くの仏教系の大学や中学・高校

などでも涅槃図が講堂に掲げられて涅槃会法要が営まれています。

この涅槃会にちなみ、永平寺、總持寺などでは、二月初めから晩課（夕方のおつとめ）で『遺教経』が読誦されます。

この『遺教経』というお経は、正式には『仏垂般涅槃略説教誡経』といい、仏が般涅槃に臨んで、仏の教えの要諦を簡潔に説いた、いわば釈尊の遺言といえるお経です。

さて場面はクシナガラの沙羅双樹の下。シーンと静まりかえった真夜中、釈尊の最後の説法が始まります。この最後の説法で、開口一番に示されたのが、戒律を



藤野正親《平成大涅槃図》岩野平三郎手漉和紙 640cm×522cm (1996) 駒澤学園 蔵

守ることでした。まずは出家者として自覚し、正しい生活規範を守るべきこと、これが仏道を歩む前提となります。これに続いて、五根（目・耳・鼻・舌・身）の感覚器官）や心を統御すべきことなどが説かれています。

このお経では、釈尊が「お前たち弟子たちよ（汝等比丘）」と何度も繰り返し呼びかけておられますが、最後の最後まで弟子たちに、仏の教えを余すところなく伝えようとする釈尊の思いが伝わってくるようであります。

また、お経の後半には、八大人覚という『遺教経』の要となる教えが説かれます。

八大人覚とは、大人（諸仏）が覚られた八つの徳目のことで、①少欲、②知足、③寂靜、④精進、⑤不忘念、⑥禪定、⑦智慧、⑧不戲論からなる教えです。

つまり、果てしない欲望に振り回されず満ち足りた生活をし（①と②）、静寂をもとめて（③）修行に励み（④）、仏の正しい教えを肝に銘じ（⑤）、瞑想を實踐して（⑥）、真実をとらえる知慧を得（⑦）、不毛な

議論、争論はしない（⑧）という内容です。

実は『遺教経』に「八大人覚」という言葉は出てこないのですが、釈尊の様々な教えを八つの徳目にまとめた、この教えは古より大切に伝承され、『八大人覚経』というお経も翻訳されています（後漢の安世高訳）。

道元禅師もこの八大人覚の教えを大切にされ、生涯にわたって書き続けられた『正法眼蔵』の最後の巻が「八大人覚」という巻でした。

すなわち釈尊の最後の説法を、自らの最後の説法、いわば遺言として示されたのです。

『遺教経』では、この八大人覚以外にも四諦の教えなど、様々な教えが説かれるのですが、この説法もいよいよ最後に近づいてくると、次のように釈尊は語りかけます。

会うものは亦た当に滅すべし
悲惱を懐くこと勿れ

今より以後、我が諸の弟子、展転して之を行ぜば、則ち是れ如来の法身、常に在して滅せざるなり

はたして今の私は釈尊のみ心になつた生き方をしているのだろうか、せっかくの仏のみ教えを棚上げしてはいないだろうか、改めて私たちのあり方を反省させてくれる言葉です。

仏の教えはよそ様（第三者）に向けられているのでありません。この私自身がしつかり向き合い、受け止めなければ意味がありません。いわば一人称の受け止めというものが大切なのではないでしょうか。

「仏道をならうというは自己をならうなり」

（道元禅師『正法眼蔵』『現成公案』より）

（会う者は必ず別れなければならぬ
悲しんではならぬ

これからはおまえたちが私の教えを實踐していく
限りにおいて仏の教えは滅することはないので

このお諭しは実に厳しい言葉です。

会う者は必ず別れなければならぬ、これは必然である。だから徒に悲しんでも仕方がない。

むしろ大切なことは、弟子たちが仏が説いた教えをそれぞれの生活の中で実践し続けることであり、その限りにおいて仏の教えは滅びることではない。そう諭されたのです。

いかなれば仏の教えを生かすも殺すも、それはお前たち次第なのだ、お前たちにゆだねられているのだ、ということですよ。

さらにこの言葉は、入滅に立ち会った弟子たちだけでなく、現在、仏のみ教えをいたたく私たちにも向けられているのではないのでしょうか。

『遺教経』に関する書籍のご案内

◆『遺教経に学ぶ』著・安藤嘉則

釈尊の最後のみ教え『遺教経』のうち「八大人覚」を中心に、その現代訳と例話を交えたエッセイ集

一、一八八円（税込）

一注 曹洞宗ブックセンター

フリーダイヤル〇二二〇―四九八―九七一